

鑑賞日本古典文学 第11卷



栄花物語・紫式部日記

松村博司 阿部秋生 編

鑑賞 日本古典文学

第11巻 栄花物語
紫式部日記



昭和51年4月30日 初版発行
昭和57年10月20日 4版発行

編者 松村博司
阿部秋生

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2の13

☎ 102 ☎ 東京 3-195208

電話 03 (265) 7111<大代表>

印刷所 信教印刷株式会社

製本所 株式会社 宮田製本所

落丁・乱丁本はおとりかいたします

0395-561311-0946(1)

序 説

『栄花物語』は、仮名文をもって歴史を物語風に叙述した、いわゆる「物語風史書」であり、このようなものを「歴史物語」という。『源氏物語』の著作されて以後、にわかに歴史的関心に基づく物語が相次いで書かれるようになった、その第一作であった。それは、歴史と文学との新しい結合を目ざそうとするものでもあった。『栄花物語』は官撰国史の延長線上に位置して歴史叙述の興味をもって作られたが、同時に『源氏物語』からも刺激と影響を受け、光源氏になぞらえて藤原道長の栄華の生涯を主眼として描こうとしたものでもある。

『栄花物語』は、ベルンハイムのいうところによれば、「その事に関心を有する範囲で、歴史的素材をその所と時の順序で物語り、或は数へ上ぐるを以て満足」し、「名聞慾や重要と思ふ人物、所行、事件を記憶に存したいといふ願望が、他の記述を生ぜしめる」という「物語風史書」(erzählende Geschichte)に相当する(『歴史とは何ぞや』岩波文庫)。それは、史実を種として歴史小説を書こうとしたものではなく、史実もしくは史実らしく装ったものについて、場面を再現しつつ「物語」的に記そうとして、文学的潤色が豊かになったものである。『栄花物語』の記述の中には、正確にいつて、編年体とはいえないような記述が多く見られる。たとえば、ある年代に、ある人物を官職名で呼ぶ場合に、後官を用いて記述していることのあるのは、その一例である。また、後に書かれるべき事柄を、年紀を無視して前に及ぼして書いていることもある。これらはいずれも先取り記事というべき事柄である。この他、(1)『源氏物語』に似せて書くため、(2)記述に明暗の色どりを与えようとするため、(3)筆者にとって都合の悪いことを避けようとするため、(4)道長を讃美しようとするため等の理由から、史実を改変したり、場面を再現するのに史料に

よらず、既往の類似の表現を借りたり、まったく想像によって形象化したりする場合がはなはだ多く見られる。しかし、これらとても作り物語における虚構とは似て非なるものがあり、すべて文学的潤色というほどのものである。

『栄花物語』は、藤原氏北家発展の歴史と、宮廷貴族の生活史とを描く中において、特に道長とその周辺を筆者自身の立場から、道長一家に好意をもって描いた「物語風史書」であった。

『歴史物語』は、一般に史料となるものを用いて書く。『栄花物語』も多くの既往の文献を用いて、ほとんど文献のまま、あるいは少しくこれに手を加えて書いた部分が多いであろうと推測される。安藤為章は『栄花物語考』において、「古き実録、または赤染紫以下、諸才女の日記家集などより抜き集め」て『栄花物語』は書かれたであろうといい、伴信友も『比古婆衣』において女房日記や見聞記を土台にして作ったものだといっている。『紫式部日記』は、『栄花物語』の史料として用いられ、しかも史料とされたものが現存する数少ないものの一つである。しかし、『紫式部日記』は、そうした史料の意味を別として、厳然たる一個の文学作品として現存している。家集を別にしては、『源氏物語』の作者紫式部のなまの姿をうかがうことのできる貴重な存在である。

『紫式部日記』は、寛弘五年九月の一条天皇第二皇子敦成親王の精細な誕生記を中心とし、翌六年正月三日に及ぶ部分と、同輩女房・同性に対する批評、自己の経歴・内省を記した部分と、六年某月十一日から七年正月十五日弟宮敦良親王誕生五十日の祝いの記事に至る部分とから成り、全体は報告を主とした消息文の体裁で書かれている。脱落や錯簡もあると推定されていて決して完全な姿ではないのであるが、『栄花物語』はその前半、敦成親王誕生記を採って史書にふさわしく史料とした。が、その捨て去った後半の紫式部の資質・性向・内面の精神生活を記した部分は、作家としての式部を理解する上において欠くことのできない大きな価値を持っているのである。

(松村博司)

目次

序説	松村博司	一	道長登場へ巻三　さまざまのよろこびへ	五
栄花物語			七日関白へ巻四　みはてぬゆめへ	三
			伊周・隆家の左遷へ巻五　浦浦の別へ	七
			伊周父の墓に詣る	三
総説	松村博司	九	彰子入内へ巻六　かかやく藤壺へ	七
系図		三	定子皇后の葬送へ巻七　とりべ野へ	八
本文鑑賞	松村博司	三	土御門殿の秋色へ巻八　はつはなへ	八
		元	敦康親王の事へ巻九　いはかげへ	九
『栄花物語』の発端へ巻一　月の宴へ		元	顯信の出家へ巻十　ひかげのかづらへ	九
村上天皇の御讓位		元	禎子内親王誕生へ巻十一　つぼみ花へ	一〇
村上天皇の御悩		元	三条院女二の宮頼通に降嫁へ巻十二　た	一〇
花山天皇の出家へ巻二　花山たづぬる中		三	まのむらぎへ	一〇
納言へ				

東宮（敦明親王）退位事件へ巻十三 ゆ

ふしで

三后並立へ巻十四 あさみどり

道長の御堂造営計画へ巻十五 うたがひ

道長の仏事善業

道長の善根無量

堀河女御の死と左大臣顯光へ巻十六 も

とのしづく

法成寺金堂供養へ巻十七 おむがく

黄昏の御念仏へ巻十八 たまのうてな

禎子内親王御裳着へ巻十九 御裳ぎ

鷹司殿倫子六十賀へ巻二十 御賀

脩子内親王御落飾へ巻二十一 後くゐの

大将

法成寺薬師堂遷仏へ巻二十二 とりのま

ひ

二三

三〇

三四

三九

三四

三七

四〇

四一

四二

四三

四四

四六

四八

四九

五〇

高陽院の競馬へ巻二十三 こまくらべの

行幸

頼通妾対の君男子出産へ巻二十四 わか

ばえ

関寺の牛仏へ巻二十五 みねの月

尚侍嬪子の死へ巻二十六 楚王のゆめ

公任の出家へ巻二十七 ころものたま

大宮彰子の出家

禎子内親王、東宮御参りへ巻二十八 わ

かみづ

皇太后妍子の死へ巻二十九 たまのかざ

り

死に直面する道長へ巻三十 つるのはや

し

道長の臨終

一七三

一七七

一八二

一八六

一九五

二〇〇

二〇四

二〇八

二一三

二一八

二二二

二二六

二三〇

二三四

紫式部日記

総説

あらずじ

本文鑑賞

秋の土御門殿

五壇の御修法

女郎花の色

物語にほめたる男

碁の負わざ

御産近づく

物語の女

菊の露

御産長びく

皇子御誕生

阿部秋生

阿部秋生

阿部秋生

二三

二五

二五

二五

二六

二六

二六

二六

二六

二七

三日の産養

五日の産養

七日の産養

宮の御しと

思ひかけたりし心のひく方

若紫やさぶらふ

御草子つくり

里居

中宮参内

五節

臨時の祭

歳末

ひきはぎ

宮仕人の心ばせ

才女論

わが身のありさま

二八一

二八三

二八六

二九二

二九四

二九八

三〇三

三〇六

三二三

三七

三〇

三三

三五

三八

三四

三四八

日本紀の御局

三六

日記の現実と物語の仮構

加賀乙彦 四〇

求道の思ひ

三三

参考文献

加納重文 四七

栄花物語・紫式部日記の窓

栄花物語の文学性

河北 騰 三九

栄花物語の歴史的特徴

山中 裕 三〇

後朱雀帝讓位の前後

加納重文 四二

栄花物語の虚構

高橋伸幸 四五

紫式部日記の世界

篠原昭二 四七

紫式部日記に見える「才」

今井源衛 四八

御草子づくりについて

池田 勉 四九

平安朝貴族女性の服装

阿部俊子 五三

☆読書ノート

栄花の蔭に

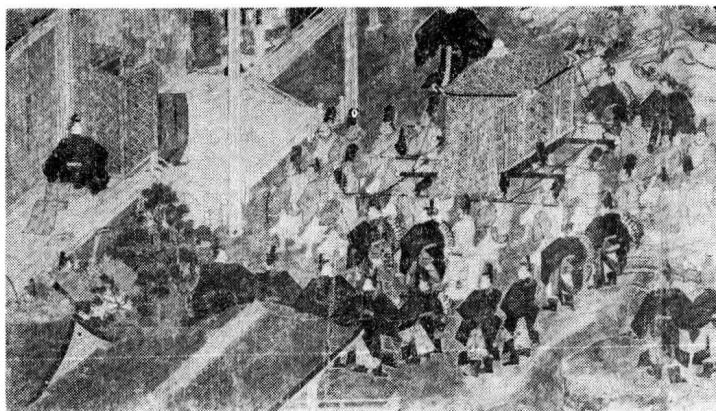
中谷孝雄 四三

栄花物語

総説

本文鑑賞

松村 博司



競馬（くらべうま）御覧のため，上東門院の葱華堂（そうかれん），
高陽院へ到着（『栄花物語絵巻』静嘉堂文庫蔵）

総 説

『栄花物語』作者としての赤染衛門 『栄花物語』の作者を赤染衛門とする説の、最も古いものは鎌倉時代に見られる。武蔵国金沢（横浜市金沢区）称名寺第二代長老であった剣阿（一二六一—一三三八）の書いた『日本紀私抄』（東京大学付属図書館蔵）に、

摩訶大円鏡 自文徳至後一条十五帝

自冬嗣公至道長公七代歟

大納言能信作御堂関白道

長息

水大円鏡 自神武至仁徳（徳は明の誤り）

至嘉祥三年五百廿二年

五十四帝

栄火 大隅守時持女

赤染右衛門作

統代継 長門守為綱作

常葉三寂随一也

と見えるものの中にあり、「栄火」は「栄花」の当て字である。この説は、「統代継」（『今鏡』）の作者を為経（為綱は誤記）すなわち寂超とするような確説を含む一方、『大鏡』（摩訶大円鏡）を道長息、高松殿明子腹の能信作とするようなにわか信じたい説を併せ伝えており、『栄花物語』の作者を赤染衛門とすることもなお多くの吟味を必要とする。

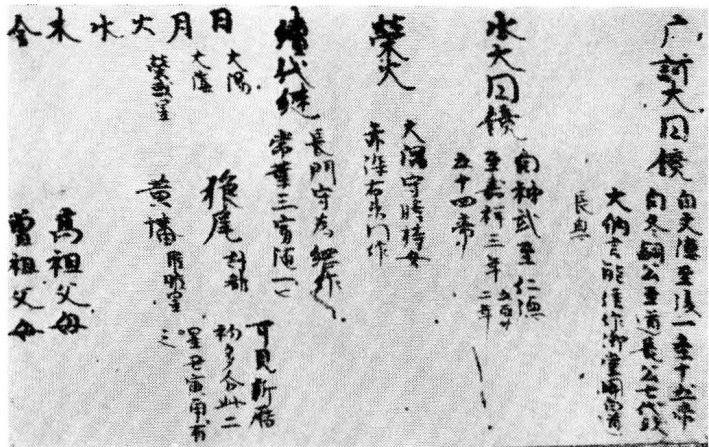
しかし、江戸時代のはじめにいたるところまでには赤染衛門作はかなり流布されたりしく、明暦二年（一六五六）の小形板本には、

本云

斯栄花物語赤染衛門述作なり、尤至宝なる物なるへし。

このころ数本をもて比較するに、展転模写のあやまりに損落の文字前後の錯簡是非をわきまへかたき処、今本書に考合清書せしめ早。

というようなもつともらしい奥書が添えられたり、刊年



『日本紀私抄』（剣阿筆、東京大学付属図書館蔵）

未詳の『栄花物語』抄出本（絵入九卷本）には、

上自寛平^宇下至寛治^堀二百年事、赤染衛門記之

と記されたりし、近松門左衛門も『赤染衛門栄花物語』

という浄瑠璃を作ったりした。しかし学者の中にはこの

ような説を鵜呑にせず疑いの目で見るものもあり、赤染

衛門の年齢からいって『栄花物語』全編を書くことは不

可能であるから、たとえ赤染衛門が書いたにしても、そ

れは卷三十へつるのはやしゝまでのいわゆる正編の部で

あったらうという説が提出された。

この間、『栄花物語』の作者としては、藤原為業（一

一七〇・一〇・五以前出家）とする説もあった。

『本朝書籍目録』に、「世継四十巻、自宇多天皇、至堀

河院御宇、載君臣事、藤為業撰」とあるのがこれである。

『世継』とは『栄花物語』のことで、それを藤原為業が

作ったというのであるが、年代の上から離れすぎていて

作者とは見做しがたい。『大鏡』のことをも、「世継」と

いうから、それと混同したものとも思われるが、『大鏡』

の作者としても年代が合わないから、『今鏡』（統世継）

を書いた為業の弟為経と思ひ誤ったものであらう。

いったい『栄花物語』赤染衛門作という説は、どうい

うところから発生したのであろうか。『栄花物語』は、第一に、その筆つきから見て女流の筆に成るものであるという見方が根本にある。もともとこれに対しては反論があり、水戸の学者安藤為章（一六五九—一七一六）のように、「堀河院より後の男子の手に出て、ふるき実録、または赤染集以下諸才女の日記・家集などより抜あつめ、女の筆めかして作れる物」と見たり（『栄花物語考』）、折口信夫博士のように、隠者階級とまではゆかぬが、下流の殿上人の中で役を退いた人々、半俗半僧のもの、あるいは僧侶（鴨長明のような）が書いたものか、優柔不断の中に辛い批評がまじっている。この辛い批評は男のものであるとするような説もある（『日本文学啓蒙』）。しかし、最近ではこの種の男性執筆説は蔭をひそめてしまった。第二に、赤染衛門が藤原道長の北の方鷹司殿倫子に仕えたことである。『栄花物語』の内容から見て、道長時代にはなだ詳しく、特に道長とその一族の周辺に詳しいことは、赤染衛門の才能からいって最も適任であると考えられたことが、恐らく伝説の発生源として最も有力なものであろう。赤染衛門の生年は明確でないが、『栄花物語』正編の終わりへつるのはやしは、

万寿四年（一〇二七）までの記事があり、その年に推定では七十一歳ぐらいであるから、いうまでもなく赤染衛門執筆の限界は正編にとどまるものである。このような閥歴上も最も適任であり、年齢上も支障がないという点から説がおこったものと思われ、それが正編続編というように細かい差別を超えて大ざっぱに『栄花物語』の作者ということになったのであろう。

このある程度の確かさを持った説が、近代になると、さらに発展する。それは、赤染衛門が大江匡衡と結婚したことである。大江氏は古来、修史の家として名がある。匡衡は、式部大輔・東宮学士を兼ね、文章博士であった。その祖父に維時がいる。維時も中納言で、式部大輔・文章博士であった。ところで「六国史」は、『日本三代実録』をもってそのあとが絶えたといわれている。しかし、実は朱雀天皇の承平六年（九三六）から、冷泉天皇の安和二年（九六九）にいたるまで三十四年もの間、国史を生み出す母体である撰国史所が置かれて活動していた。別当は、はじめ藤原恒佐と平伊望とが任じられたが、後に大江朝綱になり、その死後維時になったのである。朝綱は、維時の兄玉淵の子息で、参議・左大弁・文章博

士になった人であった。この大江氏が関与した撰国史所の成果は、『新国史』と呼ばれる史書となった。『本朝書籍目録』には、『新国史』四十巻とあり、『拾芥抄』には五十巻とある。宇多・醍醐二朝の実録とも、これに朱雀を加えたものであらうともいわれるが、未定稿に終わった。ここで赤染衛門につながる。すなわち、匡衡は、祖父たちの残した歴史編修事業を完成すること、またはそのあとを継ぐことに大きな関心を持ったであらうが、微力でどうすることもできなかった。そこで妻の赤染衛門は、夫の志を察し、『新国史』のあとを継ぐ歴史を、今までだれも試みなかった新しい「物語」の形式で叙述することを思い立ったのではないか。それは、女性の立場から見た官撰国史への批判を含むと同時に、大江氏の立場に立つての名誉回復・自己主張の意味を持つものであったのである（坂本太郎氏『日本の修史と史学』昭三三、至文堂）。山中裕氏もまた、『栄花物語』の前半を大江匡衡、後半を赤染衛門ではないかという説を発表された（『歴史物語研究序説』昭三七、東大出版会）。しかし、漢学者の匡衡が和文で歴史を書くことは考え難いことであり、ことに『栄花物語』全編は女手に出ること

が最も穏当な考えとみられるので、たとえ一部でも匡衡が執筆したであらうというような説は成り立たないであらう。といって正編だけに限っても、直接赤染衛門が筆を下した——すなわち作者だとすることは躊躇されるのであり、しかも一面赤染衛門は何らかの意味において関与するところがあったであらうと考えられる。これらすべてを勘案して、赤染衛門を直接の作者とするより、むしろ総括者の立場に置くことが最も考えやすい説であらう。『栄花物語』正編の巻々は、これがあるグループで一括することが可能であるが、一面また、全編を通じてある個人的な筆癖を察知することもできる。このような条件を満足させるためには、純粹にある個人の執筆というより、複数の筆者がおり、最終的にはそれらによって書かれたものを、ある個人が総括したと見るのである。このような総括者として最も条件的に可能性のあるのが赤染衛門になるのである。

『栄花物語』はいつ書かれたか『栄花物語』は、正編三十巻と続編十巻とにわかれたる。これは同一筆者がわけたのではなく、まず正編が成立し、それに年代を異にして、後から別の筆者によって続編が書き継がれていっ

たと考えられる。それゆえ成立も別々に考えなければならぬ。

卷十五へうたがひは、正編の成立や成立年代を考える根拠として常に用いられる重要な巻であるが、官位の記述にあたつて後官で書かれていたり、また当該巻の年次よりも前のことや後の史実が書かれていたりしており、あいにくなことに処理しやすい巻とはいえない。今、当面の問題として、この巻の中に描かれている淨妙寺建立・供養の箇所をとり上げて見よう。

又木幡といふ所は、太政大臣基経のおとど——後の御諡昭宣公なり。そのおとどの点じ置かせ給へりし所なり——藤氏の御墓と仰せ掟てたりける所に、殿の御前（道長）若くおはしましける時に、故殿（兼家）の御供などにおはしましておぼしけるやう、「我が先祖よりはじめ親しき疎き分かず、いかでこれを仏となし奉らん」とおぼしける御志、年月経けるを、「この折にこそ」とおぼしめしけり。いづれの人も、あるは先祖の建て給へる堂にてこそ、忌日にも説経・説法もし給ふめれ。真実の御身ををさめられ給へるこの山には、ただしるしばかりの石の卒塔婆一本ばかり立てれば、又

参りよる人もなし。「これいと本意なき事なり」とおぼして、この山の頂を平げさせ給ひて、高き石をば削り、短き所をば埋めさせ給ひなどして、やがて三昧堂を建てさせ給ふ。僧坊を左右に建てさせ給ひ、中に馬道をあけて、十二人の僧を住ませ給ふ。別当・所司を定めさせ給ひて、夏の法服を給ひ、やがてそのわたりの村、一つ里となさせ給ひて、水清う住み、煙絶えずして、事の便りを給はせて育みかへりみさせ給ふ程に、よろづの人聞きつぎ棲み住す。

御堂の供養寛仁三年十月十九日より。法華経百部が中に、我が御手づから書きて、一部読ませ給へり。七僧・百僧などせさせ給ひて、法服うるはしく配らせ給ふ。

その日藤氏の殿ばら、かつは随喜のため、聴聞の故に、残りなく集ひ給へり。さぎさぎの一の人など、かくおぼしよらざりけん見えたり。殿の御前仏の御前にて、三昧の火を打たせ給ふ。「我がこの大願の力によりて、この山に骨を埋み、尸を隠し給はん人、我が先祖よりはじめ奉り、親しき疎き分かず、過ぎにし方より今行末に至るまで、菩提仏果を証し、かつはみづからの二

世の願かなひぬべくは、この火一度に出でて、今日より後消えずして、我が末の世の人々同じく勤め、三昧の燈火を消たず掲げつぐべくは、この火一度に疾く出づべし」と祈りて、打たせ給ひしに、この火一度に出でて、この二十余年に消えず。その日の御願文、式部大輔大江の匡衡の朝臣仕うまつれり。多く書き続けたれど、けしきばかりを記す。はじめの有様も聞かまほしう、よく願文のことばども、仮名の心得ぬ事ども交りてあれば、これにてえ写しとらず。この折は左大臣にてぞおはします。この寺の名を淨妙寺とつけたり事ども果てて、殿の御前をはじめ奉りて、藤氏の上達部皆誦経せさせ給ふ。僧ども禄給りてまかり出でぬ。

少し引用が長くなりすぎたが、道長が木幡に淨妙寺を建てたのは、実は寛弘二年（一〇〇五）であり、その供養が行われたのは同年十月十九日であった。『栄花物語』が編年体の記述を厳守する限り、巻八へは「つはな」に書くべきことであつたが、恐らく作者は巻十五に道長の仏事関係の事業を総括的に描こうとする意図があつて、あえて書くことをしなかつたのであろう。しかし、それとはかくとして、寛仁三年条に書きこんだがために、問

題をひき起こすことになった。以下逐次検討する。

i 右の文は、寛弘二年の誤記ではないか。

i しかし、梅沢本・西本願寺本・富岡本等現存するいずれの系統本にあつても寛仁三年と記していて異同がない。

ii 寛弘二と寛仁三と、字体の類似から推して誤写ではないか。しかし、これは無理である。

iii 後文に、道長が一年中の諸々の仏事善業を行ったことを記したところにも、「殿の御出家の間いまだ久しからでし集めさせ給へる仏事、数知らず多かるに」とあり、この淨妙寺供養も出家後のことに数えているものと見られる。

以上の理由によつて、寛弘二年の誤記とは認めがたい。II 作者は寛仁三年のこととして書いた。

i 本巻を寛仁三年現在として書いている趣旨に合う。ii しかし、前後の文と矛盾撞着を起す。

イ 淨妙寺を建てたときは、道長の左大臣時代であつたといつてゐる。これは寛弘二年とした場合に該当する。

ロ 「やがてそのわたりの村……よろづの人聞きつ